

---

# 倶楽部 -Kounotori 2008.5.1 vol.21

---

倶楽部 <

発行人：吉川文彦  
編集：こうのとり和歌宮



HEART to HEART

「それぞれの挑戦」

2007 年度こうのとり外来の成績

編集後記

---



# HEART to HEART

## 「それぞれの挑戦」

### Mさんご夫妻のお話し

#### A子さん

夫と私が出会って結婚したのは平成元年のことでした。その当時は共働きで、会議やセミナーなどで遠くまで出張を命じられることも多く、すれ違いの生活で、なかなか妊娠しない状態が気にはなっていました。羞恥心もあって病院の門をくぐれずにいました。どうしたら妊娠できるのか情報を集め、基礎体温をつけ、食生活に気をつけ、積極的に体を動かしたり、体質に合わせた漢方薬を服用したりの小さな、そして自分たちで出来る努力を続け、平成四年に自然妊娠し、稽留流産をしました。それから本格的に不妊治療に突入することになり、何回も続けた体外受精の成果で再び妊娠、しかし残念ながら再び稽留流産を経験しました。その後、再び、治療を再開し、現在に至っています。幾つかの施設を経て、何人かの先生に治療をしていただき、最後にたどり着いたのがここ、諏訪マタニティーです。

現在、我が国では他の先進諸国と同様、あらゆる部分でレバレッジ増大の大きなツケが廻り、環境破壊、少子高齢化が進み、一気に多くの社会問題が噴出し、少ない人口、少ないお金、少ないエネルギー、全てが縮小規模の中で社会を成り立たせなければならなくなりました。私たちが関わっている不妊治療、この治療費をめぐっても様々な議論がなされ、技術を提供する先生方は今までよりも質が高く、手間のかかることをより安価に提供することで、毎年一兆円も増えている国民医療費を抑制しようと必死になっらっしゃいます。生殖補助医療に係わる管理は最先端の設備を整えないと行えないので、当然その恩恵を受ける私たちが支払う治療費に反映されるのですが、施設ごとの差、地方と都市の差、周期におけるプログラムの差など色々な条件から金額は大きく開きます。また、私たちが受ける時間的な消失、精神的な負担もどの施設を選ぶかによって大きく変わってきます。

諏訪マタニティーは私たちが今までに訪ねたどの施設よりも治療費がかからないというのが現実で、プログラムも良く工夫しているなどと言うのが感想です。最初に時間をかけてきちんとした説明があり、定期的に勉強会が催され、院内の至る所にパンフレットが置いてあり、TV放送の合間に過去の治療成績や治療の説明が流れ、治療に関しての情報を仕入れるチャンスに恵まれています。またカウンセリングルームもあり精神的なサポートもしていただき、通院するために消失する時間や精神的負担も今までとは違って変わって、少なくなりました。

私たち夫婦が別の施設で治療を開始した頃は、まだ出来高払いで、使った薬や行ったことなどを積み重ねる形で診療報酬が支払われていたこともあり、多数の検査（血圧や心拍数から卵管通気、卵管造影）、大量の投薬（医師に対し「人工授精の後、嘔吐してお腹が痛みます。」と訴えただけで、ムコスタやガスターなどの胃薬からブスコパン、抗不安薬まで出て、全部飲むべきか悩んだことがあります）、謝礼の強要（先生本人から直接ではなく、周りのスタッフの方から「お世話になっているのだからお中元、お歳暮ぐらいはした方がいいんじゃない？」と要求される）を受けたため、人工授精なのにかえって、体外受精よりも多くの時間的、金銭的コストが、かかっていました。ほとんど毎日病院通いでしたから。体外受精はかなり早くから希望していましたが、受診していた先のある病院では、「医師会（先生は産婦人科学会と言いたかったのかもしれませんが…）が定めたガイドラインでは、あなた方夫婦は適用にならない。いつとは言わないが（自然妊娠したこともあってか）うちで人工授精を続けていればいつかは必ず妊娠する。」と、次のステップに進むことを事実上拒否されたこともあり。病院に出入りしている業者の利益追求によると思われる、様々な不妊ビジネスの接触も幾つか経験したことがあります。サプリメントや健康器具販売、化粧品やエステティック、はては養子縁組の斡旋です。殆どはお話だけ行って断ったものが多いのですが、いくら睡眠をきちんと取っても、もともと私は基礎体温がきれいな二層性のグラフにならず、医師から「使っている基礎体温計に問題がある」と何本も種類の違う病院の基礎体温計と体温表をセットで買わされたこともあります。養子縁組は実母様の気持ちよりも、斡旋に係わる人たちや医師への寄付（「ビジネスとして行っているので無料ではないが、非常識な金額ではない」などと説明）のことを強調されたので夫と共に悩みました。医療人や医学研究者の世界には、一般の社会と異なる特殊事情が存在することを学んだこともあります。夫は職場で私の不妊治療のことについて触れられ苦しい思いをしたみたいで、研究のための情報の共有化と守秘義務の狭間で医師が患者の情報をどのように扱うかまだまだ整備されるのには時間が必要だと思いました。周りの人の薦めもあってアメリカの施設での治療を選択したときには、一回目の採卵の後、提供卵子プログラムを実行した日本人の医師夫婦の写真を数枚見せられ、「この技術で彼らは子供を持つことが出来たんだ」と直ぐに提供卵子と代理母によるプログラムを紹介されました。最先端の技術をファーストフードを食べるときの様に、時間をかけずに実行していく文化の恐ろしさ（もちろん効率が良いことで幸せになることもあります。が…）、最先端の技術の選択を可能にすることは、つらい決断を強いることでもあり、もしかしたら幸せになる別の可能性を駄目にしてしまうことでもあるのだとしみじみと思いました。

こうした不妊治療で嫌な思いをするたびに施設を替えて

きた私達ですが、諏訪マタニティーに通っている平成 16 年から平成 17 年の間に大きなトラブルに巻き込まれました。実家が小さな会社をしていますが、その取引先の一つの会社が破産してしまったのです。年を取り体の弱っている両親に変わり、夫と私はその処理をまかされ、弁護士に相談したり、本来の仕事の合間に、システムの復旧を試みたり、破産管財人に手紙を書いたりしました。その時に相手側弁護士の何気ない言葉（「破産した会社の社長さんは精神的に追いつめられています。奥さんは 3 人のお子さんを抱え途方に暮れています。貴女はお子さんがいらっしゃらないかわからないでしょう。貴女が年を取った時に支えてくれるのは、この人たちの 3 人のお子さん達の世代です。」）はエコーのように何回も私の心の中で響きました。私達夫婦の不妊は今現在、そして将来において社会に迷惑をかけていくものなのか…？その後、この会社の破産は医療制度改革による環境変化にうまく適応出来なかったこともあるけれど、それ以外に、お付き合いしていた人の話から奥さんのクレジットによる派手な生活のツケがきていたことも大きな要因であったことを知りました。子供が 3 人もいるということで手厚く保護され、税金さえも払っていない…。この国は子供がいれば簡単に責任逃れが出来るのか？テロや自分の意に沿わぬ者への無責任ないじめや複雑な事情に対応する思考力の欠如はこういった土壌から育ってきているような気がしてなりません。

両親から依頼された処理もほぼ終わりかけた頃、心と体に変調をきたしていることを自覚した私は諏訪マタニティーのカウンセリングルームで手厚いケアをしていただきました。心の中で起こっているクライシスを、吉川先生やカウンセリングルームの渡辺先生、そしてスタッフの皆様にとどのような言葉で表現したのか今となっては、はっきり思い出せません。それだけいろんなことが重なって、心にダメージを受けて混沌としていたのですが、カウンセリングを受けた後、少しずつですが体の調子が良くなっていったのを記憶しています。今にしてみると「もうすぐ閉経がやってくる。今までの努力はいったい何だったのか。」…そういう言葉で表現される、やり切れなさだったような気がします。今まで養子縁組の話や治療方法の押しつけなどパターナリズムの強い施設を経験していた私は、諏訪マタニティーでお話を聞いているうちに自分自身の意志の確立の重要性に気づきました。

=== 私自身の体のことなのだから生理がいつ終わってしまうかなんて誰にもわからないのだ。ましてや治療の方法や治療をいつまで続けるのかは私が決めることなのだ。===

最近忙しいにもかかわらず、夫と一緒にいる時間が増えてきました。二人で向かい合って勉強してる時なんかは、何も言わなくても楽しいのです。夫を生んで育ててくれた

両親にも感謝をしています。しかしそれと同時に一人息子である夫の生家を絶家させてしまっは…と悩んでいるのも事実です。それに対して夫の言葉は、「絶家はたいした問題ではない。二人で他者への共感と柔軟性を持って生きてゆけたら…」と言います。これからも二人で悩みながら、話し合いながら治療を続けていくのでしょうか、長い年月の治療がかけがえのない財産を与えてくれているような気がしてなりません。

#### T 男さん

私たちは県外から治療に来ています。

県境の長い長いトンネル（恵那トンネル）を越えてここに来ています。

この恵那トンネルはとても長いのですが、車を走らせると必ず出口に到達します。

しかし、不妊治療に関しては、何時になったら出口に到達するのか、そもそも出口があるのかさえ不明です。

不妊症の患者はこういった不安心理にさいなまれます。

不妊症に関しては施設及び医師の選択がとても大事だと思います。

SMC（吉川先生）がベストであると言い切ることは私には出来ません。なぜならば、私たち夫婦は世界中の全ての不妊治療施設に行ったわけではありませんから。

しかし、ベターであると言うことは出来ます。国内各地の多くの施設および海外（カリフォルニア）の施設に私たちは行きましたので。

私たちにとって良くなかった施設はどの点が良くなかったのでしょうか？

高齢者を門前払いする施設がありました。高齢者を排除することによって妊娠率を上げようという考えなのでしょう。十分な説明をしてくれず、質問をすると怒り出す医師もいました。勉強不足なのでは？と感じられました。

患者を実験台としか見てない医師もいました。

「赤ちゃん製造工場」といった雰囲気のある施設もありました。

夫婦一緒に診察室に入れない施設もありました。私は不安な気持ちの元に待合室で待たなければなりませんでした。

吉川先生は、妊娠判定で駄目だったときは、とても残念そうな顔をされます。

質問をしたら的確に回答して下さいます。我々は納得できました。

今のところ結果はでていませんが、絶望的な気分ではありません。

それは、根津先生、吉川先生、そしてその他のスタッフの皆様によるアドバイス、励まし、叱咤のおかげだと思います。

何時になったら出口に到達するのか、そもそも出口があるのかさえ不明ですが、あきらめずに前進し続けます。



# HEART to HEART

## Kさんのお話し

私は1県に住む44才、教員です。これまでの20年、ただひたすら仕事にエネルギーを使ってきました。結婚して10年「そのうち子どももできるだろう」と自分勝手に思い真剣に向き合ってきました。妊娠を侮っていました。

43才の時、近所の1産婦人科を受診しそこで開かれている「不妊学級」に参加しました。始まる時刻ぎりぎりに着いた私は最前列の席に座り、しばらくするとそこに院長先生が入ってこられました。先生は私の顔を見たあと（私にはそう思えたのです）開口一番「ここで出産した人の最高齢は42才です。」と言われたのです。その院長の言葉に、ショック以上の怒りがこみあげ、あとの話などはほとんど耳に入りませんでした。説明はNHKの「生命の神秘」という映像を見たあと、数枚のプリント（医学雑誌からの抜粋のようなもの）に書いてある医学用語ばかりの難しい説明で理解できませんでした。その日からインターネットで「不妊治療」を検索し、不妊のことと病院探しに没頭しました。そんな時、向井亜紀さんの記者会見をテレビで見たのです。向井さんの切実さが私の胸に迫り、私を次への行動へと導いてくれました。これも後から思うと不思議な縁です。もし、1産婦人科であのような説明を受けていなかったらそのまま過院していたに違いありません。また、もしこの会見を見なかったら諏訪マタを知ることもなく今の現実はありませんでした。次に根津先生を検索し諏訪マタのHPを見ました。厳しいコメントもありましたが、根津先生の治療に向かう姿勢が伝わり、ここには他にはない何かがあると直感し「転院するならここだ！」心を決めました。

初めての診察の日、ホームページで根津先生が書かれていることを読んでいたので「もしかしたら、あなたの年齢ではもう無理。妊娠できたとしても、生まれてくる子どもが可愛そうだから治療はしません。」と言われたらどうしよう。そんなこと言われたら私は絶対に立ち直れないと思い、夫と母と一緒に来てもらいました。

内診後「では、まず検査から始めます」と伝えられ、「私はここで治療を受けられるんだ」とほっと胸をなで下ろしました。帰りの電車の中の私は、来るときとは全く違う心持ちで、まるでもう妊娠したとも言われたような、明るく希望に満ちた思いでした。その後2回の体外受精・胚移植に挑戦し2度とも撃沈しましたがその2度で感じたことを書きます。吉川先生がお忙しいことは漠然とは知っていましたが、採卵・胚移植を体験してみて、いかに先生がご自身の時間のほとんどを私たち患者のために使ってください

ているの分かりました。外来の診察は8時30分に始まりますが、実はその前に先生は一仕事どころか二つも三つもしていたのです。採卵の手術は7時から始まります。ということは7時前にすでに先生は病院に来ているわけです。採卵は1件だけではありません。日によって違うのですが、5件位あるようです。（多いときにはもっとらしい・・・）そして午前中の外来が始まります。先生の机にはカルテが山になっています。山脈といった方がいいかもしれません。大変な数の患者さんを診察なさったあと、昼ごろから胚移植です。これも日によって違うようですが、少なくはないでしょう。休む間もなく、午後は入院されている患者さんの回診です。夕方6時半からは月2回の不妊治療についての説明会です。大きな広間に50名くらいの方が集まって治療についての詳しい説明があります。先生は休みなく、椅子に座ることもなく凄まじいほどの熱意をもって2時間通してお話ししてくださいます。

診察室の先生の様子ですが、初めは、緊張感が漂ってなかなか質問するタイミングを失ったり、指示を聞いたはずなのに診察室のドアを出た瞬間にすべて忘れてしまい、処置室の看護師さんにもう一度確認して頂いたこともありましたが、でも、初めての体外受精・胚移植をして2週間後の妊娠判定を聞きに来て、「Kさん、ごめんね。妊娠してなかったわ」と言われたときとても辛い内容でありましたが、私一人が辛いとは感じませんでした。先生が日々私たち患者のために「なんとかしよう」「なんとかしてあげたい」と身を粉にして力の限りを尽くして下さっているのを知っているからです。先生も共に私たちのこの辛さを背負って下さっていると感じました。

採卵の前日から胚移植までは諏訪に滞在しています。ゆくり過ごすことなどこれまでの人生でなかった私には、別な世界で生きているような感覚さえあります。決して金銭的に余裕があるわけではないのですが、往復の時間が体力消耗につながると思ったからです。

もし、この治療に取り組んでいなかったら、私は多くの方々に助けられて生きていることを知ることができず、感謝の念を抱くことなどなかったと思います。

自分の力だけでは何ともしようがない状況に追い込まれたことで、生まれればなし育ちばなしの自分のに気づくことができました。

諏訪の町で出会う方々は本当に温かい方ばかりです。私が諏訪に宿泊しているとき、ちょっとした観光気分ですぐの町の中をくまなく歩いていきました。そこで出逢った方達は惜しみなく私に愛情を注いでくれました。感謝をもってここにその一部を記します。

下諏訪駅通りにある「サロン諏訪」で500円の昼食を頂きます。地元に住むおばちゃんグループが近所のお年寄りのために運営していて、中にはいと必ずと言っていいほどおばあちゃんと相席になります（私もそれを望んでいるのですが）。「どこから来たの」から会話が始まり、時にこ